



附託す。時に新羅僧行心といふもの有り、天文卜筮を解る。皇子に詔げて曰はく、「太子の骨法、是れ人臣の相にあらず、此れを以ちて久しく下位に在らば、恐らくは身を全くせざらむ」といふ。因りて逆謀を進む。此の詿誤に迷ひ、遂に不軌を図らす。嗚呼惜しき哉。彼の良才を藎みて、忠孝を以ちて身を保たず、此の奸豎に近づきて、卒に戮辱を以ちて自ら終ふ。古人の交遊を慎みし意、因りて以みれば深き哉。時に年二十四。

(三) 一首 略)

五言。臨終。一絶。  
金鳥西舎に臨らひ、鼓声短命を催す。泉路賓主無し、此の夕家を離りて向かふ。  
(懐風藻 大津皇子)

④ 皇子は、淡海帝の第二子なり。志懷温裕、局量弘雅。始め大津皇子と、莫逆の契を為しつ。津の逆を謀るに及びて、島則ち変を告ぐ。朝廷其の忠正を嘉みすれど、朋友其の才情を薄みす。……(同 河島皇子)

⑤ 詔して曰はく、「皇子大津、謀反けむとす。詿誤かれたる吏民・帳内は已むこと得ず。今皇子大津、已に滅びぬ。従者、当に皇子大津に坐せらば、皆赦せ。但し礪杵道作は伊豆に流せ」とのたまふ。又詔して曰はく、「新羅沙門行心、但皇子大津謀反けむとするに与せれども、朕加法するに忍びず。飛驒国の伽藍に徙せ」とのたまふ。(日本書紀 朱鳥元年十月二十九日)

⑥ 伊勢神祠に奉れる皇女大来、還りて京師に至る。(同 同十一月十六日)

大伯皇女・大津皇子の歌

大津皇子、被死らしめらゆる時、磐余の池の陂にして涕を流して作りましし御歌一首  
ももづたふ磐余の池に鳴く鴨を今日のみ見てや雲隠りなむ(万葉集三・四一六)

大津皇子、竊かに伊勢の神宮に下りて上り来ましし時の大伯皇女の御作歌二首  
わが背子を大和へ遣るとさ夜深けて暁露にわが立ち濡れし(二・一〇五)  
二人行けど行き過ぎ難き秋山をいかにか君が独り越ゆらむ(二・一〇六)

大津皇子薨りましし後、大来皇女伊勢の斎宮より京に上る時の御作歌二首  
神風の伊勢の国にもあらましをなにか来けむ君もあらなくに(二・一六三)

見まく欲りわがする君もあらなくになしにか来けむ馬疲るるに(二・一六四)

大津皇子の屍を葛城の二上山に移し葬る時、大来皇女の哀しび傷む御作歌二首  
うつそみの人にあるわれや明日よりは二上山を弟世とわが見む(二・一六五)  
磯のうへに生ふる馬酔木を手折らめど見すべき君がありと言はなくに(二・一六六)

大津皇子、石川郎女に贈る御歌一首

あしひきの山のしづくに妹待つとわれ立ち濡れぬ山のしづくに(二・一〇七)

石川郎女、和へ奉る歌一首

吾を待つと君が濡れけむあしひきの山のしづくに成らましものを(二・一〇八)

大津皇子、竊かに石川女郎に婚ふ時、津守連通その事を占へ露はすに、皇子の作りましし御歌一首  
大船の津守の占に告らむとはまさしに知りてわが二人宿し(二・一〇九)

日並皇子尊、石川女郎に贈り賜ふ御歌一首女郎、字を大名児といふ  
大名児を彼方野辺に刈る草の束の間もわれ忘れめや(二・一一〇)

但馬皇女・穂積皇子の歌

但馬皇女、高市皇子の宮に在す時に、穂積皇子を思ふ御作歌一首  
秋の田の穂向の寄れること寄りに君に寄りなな事痛かりとも(二・一一四)

穂積皇子に勅して近江の志賀の山寺に遣はす時、但馬皇女の作りましし御歌一首  
後れ居て恋ひつつあらずは追ひ及かむ道の阿廻に標結へわが背(二・一一五)

但馬皇女、高市皇子の宮に在す時、竊かに穂積皇子に接ひて、事すでに形はれて作りましし御歌一首  
人言を繁み言痛み己が世に未だ渡らぬ朝川渡る(二・一一六)

但馬皇女薨りましし後、穂積皇子、冬の日雪の落るに、遙かに御墓を見さけまして、悲傷流涕して作りましし御歌一首  
降る雪はあはにな降りそ吉隠の猪養の岡の寒からまくに(二・二〇三)